

ベリーショート賞

# オレレンジジュース

吉野 梶子

渴いた。

「水が欲しいわ」

わたしは布団をかぶったまま、ひびかれた声でつぶやく。部屋は窓からまれるオレンジ色のひかりを浴びて、つくりものめいたあかるさがある。

「蛇口はそこだよ」

男がいう。オイカワさんという名前のひと。

「水道の水は苦いわ」

「水に甘いも苦いもあるか」

オイカワさんはそっけない。けれど、めんどろうだと言いなगराम、彼はいつだつてわたしに水を汲んできてくれる。わたしのために。

しかたがないので、わたしはだまって苦い水を受けとる。西日に透かして、それをくるくると揺らしてみる。ガラスコップのなかで循環するカルキのにおい。わたしは苦い水を飲む。この男は水の味もわからないのだ。かわいそう。

わたしは彼にキスをする。水の苦さを教えるために。彼はなにも知らないみいたな顔で笑う。笑いながらわたしのキスを受ける。やわらかくわたしの頭を撫で、頬に手を添える。つめた

くてかたい。顔に触れる指輪の温度に、わたしは眉をひそめる。犯人は左手の薬指のつけ根だ。ここに来るときくらい、はずしてくればいいのに。

薬指の血管は、彼の心臓につながっている。たぶん、他の女の薬指にも。噛み切つてやりたい、と思う不穏な気持ちを押し殺して、わたしはやさしく彼の舌をなめる。彼にあたえたはずの水が、またわたしのなかに戻ってくる。こうして、わたしは苦い水に満たされる。

わたしたちのデートはいつも夕方。夕方はとてもみじかい。夕方は確かにみじかいけれど、そのぶん、夕方はあかるい。朝のあかるさとは異質な、あかるさ。夜が近いと思うぶんだけ、夕方はいつそうあかるくなる。

これからもつとあかるくなる、と思っているときのあかるさと、もうこれ以上はあかるくならない、と知っているときのあかるさは、全然ちがう。夕方のあかるさはかなしい。わたしたちの関係と似ている。

「じゃあね、」

オイカワさんは帰るときいつもそう言う。グッバイでも、シー

ユーでもない、あいまいなことば。そんなあいまいさと、ぼんやりした温みだけをこの西向きの部屋にのこして、彼は家に帰る。布団の温みはそのうちに消えるけれど、あいまいさはいつまでも消えない。

「もう帰るの」

彼がすっかりエレベータを降りてしまったころ、わたしは駐車場に向かう彼の後頭部に向かつて、つぶやく。窓から見える彼の頭はすでにグリーンピースほどの大きさで、ひどくたよりない。もう帰るの、は、もう帰ってしまふの？ と彼に問いかけているようでもあるし、彼はもう帰るのよ、と、自分に言いさかせているようでもある。

オイカワさんはもう赤いセダンのなかで、芥子粒ほどの大きさになっているはずだ。あと一分もしないうちに、彼の姿は窓枠から消える。わたしの世界から。

わたしはこの部屋から動かない。キッチンと、大きなベッドと、ガラスコップ、ミニテーブル、それから一メートル四方の窓。すこし窓に近づけば、きつと彼のセダンのゆくえが見える。見れば、彼を追いかけているような気分になれる。けれどわたしは動かない。誰の邪魔にもならないように、ここに閉じこもる。かわりに、窓の向こうで太陽が動いて、少しずつわたしを黒くする。

暗くなる。夜が来る。暗いとき、こわいとき、寂しいとき。一番いっしょにいてほしいとき、彼はいつもここにいない。日暮まえの、嘘のようなあかるさのなかでだけ留まっていられる。

西の空をただ通り過ぎてゆくだけの、雁みたいなひと。しかたがないので、わたしはコップに水を汲み、ひとりで渴きをうるおす。うるおうまで、何杯でも何杯でも飲む。それから、じつと夜の底に体を沈めて、次の夕方を待つ。

「水を飲みなさい」

ママは言った。きれいになるためには水を飲まなければ。

今考えればからしいが、当時わたしは一日に三リットルの水を飲んだ。体重の七分の一の量の水を、毎日体に入れていた計算になる。

「どうしてきれいにならなくちゃいけないの」

「あなたが女だからよ」

わたしがたずねると、ママはこちらを向きもせずそう言った。幼いわたしには釈然としない答えだったが、それでもそれは他でもないママの言うことだったので、わたしは忠実に水を飲み続けた。

ママはたったひとりきりのママだったが、わたしには常に不特定多数のパパがいた。彼らはいつも夜中、かならずばらばらにやってきて、ママを連れてどこかへでかけてゆく。ママは朝には帰ってくる。

「夕べのひとだあれ、」

わたしが聞くと、ママはいつでも、あなたのパパよ、と答えた。おなじパパが何度も通ってくることもあれば、一度来ただけで二度とあらわれないパパもいた。

どのパパであっても、夜中にママを連れていってしまふことはおなじだったので、わたしはパパが嫌いだった。パパのせいで、わたしはひとりりで眠らなければならぬ。せまい安アパートの部屋の夜は、寒く、暗く、そして長かった。

あかるくなることはわかっていたけれど、わたしはけして電氣をつけようとはしなかった。電氣はママのいない部屋を隅々までしらじらと照らしだし、わたしの足もとに濃い影をつくる。夜の暗さよりも、よほどくろくろとした、恐ろしい影。電氣はちつともやさしくない。わたしは電氣のあかるさがきらいだった。

暗いなかで布団にくるまっていると、だんだんのどがざらざらしてくる。ざらざらは何かこわいことが起こるたび——たとえば、アパートの前を大型トラックが通ったり、誰かが呼び鈴を鳴らしたり、あるいは、隣の部屋から何かが割れる音が聞こえたりするたび——すこしずつ広がっていった。何があっても、わたしはけして泣かなかつた。そんなことをしたら、体のなかにわずかに残った水まで外に流れ出て、とりかえしがつかなくなるような気がしていた。

そのうちに、体の内側せんぶがざらついてきて、水を飲めば楽になる、とわかる。それはほとんど本能的な感覚だ。わたしは布団をぬげだし、ペットボトルから水を汲む。それを飲む。すこしだけ、ざらざらがやわらぐ。けれど、それも長くはもたない。わたしはざらざらから逃れるために、また水を汲み、飲む。こうして、わたしは渴くということを覚えた。

部屋には天然水のストックが何本もあった。ママのいない部屋で、わたしはただひたすら水を飲んだ。飲んででも飲んで、体はいくらでも水を求めた。ペットボトルの水に溺れながら、幼かったわたしはぼんやりと理解した。結局のところ、きつとママも渴いていたのだ。

ママは、わたしが八つにならないころ死んだ。

男のひとに殺されてしまったらしいが、それがパパだったのかどうか、わたしにはわからない。絞殺されたというママの死に顔は水死体のようにむくんで、とてもきたなかつた。

それでもわたしは、水を飲むことをやめられない。

渴いた。

わたしは冷蔵庫から天然水を取りだし、ガラスコップに注ぐ。それを飲み干す。また注ぐ。飲み干す。注ぐ。ペットボトルから最後の一滴を注ぎ終えて、わたしはため息をついた。今日はことこのどが渴く。きつと、昔の夢を見たからだ。

目が覚めたのは、もう陽も高くなつてからだった。わたしは頭のさきまで布団にくるまっていて、ぐっしよりと汗をかいていた。

わたしはママの顔をうまく思い出すことができない。香水の甘いいにおい。パーマのかかった黒い髪。女の体。それだけだ。たぶん、わたしと同じ顔だったんだろう。はしたない女。コップの水にうつる自分の顔を見ながら、わたしは思っ

水面にうつった顔ごと、水をいつきに飲み干す。コップを力

ウンターにおいて、大きく伸びをする。楽しいことを考えよう。なにか楽しくて、たあいのないことを。

たとえば、そう、お酒だ。今日は、二時からゆたかちゃんと呑む約束だった。昼ひなかからお酒を呑む、というのは、なんだか悪いことをしているみたいでとても楽しい。わたしたち共犯者ね。そう電話口で冗談めかすと、ゆたかちゃんは困ったように笑っていた。彼はときどき電話をかけてきて、わたしを誘う。

はじめて会ったとき、わたしたちはまだ高校生だった。わたしはねずみ色の制服を着て、ひとりで体育館横の自動販売機の前立っていた。その日はとても暑くて、わたしはとてもどろどろが渴いていたのに、小銭を忘れてしまつて途方にくれていたのだ。そこに、ゆたかちゃんがやつてきた。

彼はわたしに、どうかしたのとたずねた。わたしはお金がないのと答えた。彼はそう、と言った。それから眉を下げて不器用に笑い、

「しかたがないなあ」

と言った。唇のすきから白い歯が見えて、わたしは彼に好感をもった。

「何が飲みたい？」

彼は言った。水がいい、と答えると、へんな顔をしていた。次の日に告白されたので、わたしは彼とつきあうことになった。

「おじゃまします」

ゆたかちゃんは二時ぴつたりやってきた。

「いらっしやい。変わらないわね」

「先週会ったばかりじゃないか」

「そうだけど」

「一週間じゃ、人間そんなに変わらないよ」

「変わらないわね」

「僕の話聞いてた？」

「そういうところが、よ」

ゆたかちゃんは変わらない。たとえば、時間に忠実なところとか、部屋に入るときの律儀なあいさつとか、わたしのことををぜんぶていねいに受けとるところとか。

わたしは、ゆたかちゃんのそういうところが好ましいと思う。

たぶん、わたしは変わってしまったから。

「何を買ってきたの？」

「ワインとチーズ。ソーセージ。それから、オレンジジュース」

「すてき」

「こうして呑むのもいいけど、たまには外で呑まない？」

「そうねえ……」

「外に出るのはいや？」

「ここがいいの。ここで彼を待っているのが」

わたしはそう言いながら、ワインをガラスコップに注ぐ。赤いお酒がなみなみと溜められた、グラス。お酒を入れたときには、わたしはそれをグラスと呼ぶことにしている。

ゆたかちゃんの表情がくもったのには気づかないふりをして、わたしは笑う。

「乾杯しましょ」

グラスをかさねて、わたしたちはかんばい、と言う。ソーセージとチーズの袋を開けてお皿にもりつける。グラスをくるくるまわしてから、ワインを呑む。

お酒を教えてくれたのは、ゆたかちゃんだった。おいしいカクテルや、よくない呑みあわせ、酔いをさます方法、それから、グラスのまわし方も。

わたしのはたちの誕生日に、わたしたちははじめていっしょにお酒を呑んだ。そのときゆたかちゃんが住んでいた、大学の学生寮で。

あのときはお金がなかったから、ワインなんて買えなかった。一本の缶チューハイをふたりぶんのグラスに注いで、ゆたかちゃんはんばい、と言った。わたしはありがとう、と言った。ゆたかちゃんと別れて、もう四年になる。

考えてみれば、ふしぎな関係だ。別れても、ゆたかちゃんわたしに電話をかけるのをやめない。わたしもそれを拒まない。わたしたちはときどきこうしていっしょにお酒を呑む。呑みながら、たあいのない話をする。天気の話。共通の知人の近況。高校時代の話。つきあっていたころの思い出。

あのとき、別れようと言ったのはわたしのほうだった。

「ほかに好きな人ができたの」

わたしは言った。ほんとうは、そのとき好きな人なんていな

かったけれど。

ゆたかちゃんは、そう、といって黙った。五分くらい黙って、それから、しかたがないな、と言った。わたしは、ゆたかちゃんにうそをついたことについて、とくに何も感じなかった。もうそれ以上、気持ちをもたせることができなかった。好きな人が他にいてもいなくても、熱が冷めるときはある。そういうものだ。

ゆたかちゃんかわいいそうだと思う。わたしみたいな女に恋をしてしまつて。

「あのひと、」

お酒がだいふまわってきたころ、ゆたかちゃんが重い声で言う。

「あのひと、まだ続いているの、」

「オйкаワさんのこと？」

わたしはいちおう聞きかえす。

「やめたほうがいいと思うよ」

「どうして？」

「そろそろ潮時でしょう」

「でも、愛してるの」

わたしは答える。答えてから、ちがうな、と思う。

どうして、この愛ということばは、口にしたとたんこんなにもぞららしいものになるのだろう。わたしはわたしとオйкаワさんの愛について形容するのに適切なことばをさがそ

うとしたが、それはどうしてもみつからなかった。

ゆたかちゃんは言った。

「わかってるの。囲われてるっていうんだよ、そういうの」

囲われている。わたしはちいさく繰り返し返した。それはとてもわたしにぴったりのことばだった。逃げられない、みたいな響きが、とくに。

囲われている、は、愛なんかよりもずっと確かだ。わたしは最後のワインを呑み干す。

「いけない？」

わたしは笑う。空のグラスをかたむけて、ゆたかちゃんのほうに向ける。

「わたしはこれでいいの」

「……、しかたがないなあ」

ゆたかちゃんは笑う。いつもそうやって笑う。悪いことなんて、なにも無かったみたいに。

テーブルの上には、もうワインもチーズもソーセージも残っていない。オレンジジュースだけが、まだ瓶のなかに閉じこめられている。あまつちやつたね、とゆたかちゃんは言う。きまり悪そうに下を向いて、細い指で頭を掻く。彼の腕時計は、午後三時五十四分を指している。オレンジジュースの瓶が、テーブルに黒い影を落とす。

じきに夕方になる。もう帰ってもらわなければ。

「オレンジジュースを持って帰ってね」

わたしはゆたかちゃんに言う。

悪いことなんてなにも無い。

ゆたかちゃんは、わたしに水を買ってくれたはじめての男の子だった。

ゆたかちゃんが帰ってしまったあと、わたしはもう一度彼と出会った日のことを思い出した。はじめて会った女の子に飲み物を買うというのは、いま思えば、あまりゆたかちゃんらしくない行為だった。ひとめぼれだったんだよ。あとになって、ゆたかちゃんは言った。

「どうしても君と知り合いたくて、がんばったんだ」

そんなことを聞いて、わたしはゆたかちゃんをいつそういとおしく思ったものだった。

あのころ、わたしはたしかにゆたかちゃんを愛していたし、彼もわたしのことを愛していたと思う。

夏の日差しの下で、わたしは天然水を飲み、ゆたかちゃんはオレンジジュースを飲んだ。一口ちようだい、と言って、ゆたかちゃんはわたしの水に口をつけた。

……やつぱり、ただの水だね。ただの水よ、あたりまえでしょう。わたしたちは大きな声で笑った。顔がほてって暑かった。太陽はまぶしく、正しくわたしたちの真上にあり、校庭には影なんてほとんどなかった。

——オイカワさんとも、いずれだめになってしまっただろうか。

「でも、愛してるの」

わたしはさっきゆたかちゃんに言ったことばをくりかえした。まるでいいわけをするみたいに。

のどが渴いた。

窓から西日がさしこみ、部屋がオレンジ色に染められる。

わたしはふたりぶんのガラスコップを洗い、ワインの空き瓶を捨てて、ゆたかちゃんとおつきあいをなかつたことにする。お酒のにおい。シャワーを浴びる時間はあるかしら。その前に、窓を開けておかなくちゃ。わたしは焦る。

悪いことなんてなんにも無い。それでも、陽はどんどんかたむいて、わたしの影は長くなる。

「愛してるの」

わたしはもう一度つぶやく。体内にざらざらが広がる。水を飲む時間はない。

オレンジジュースを飲んでおけばよかった、と思う。洗ったばかりのガラスコップは食器棚に押しこまれて、濡れたままかさねられている。

もうすぐ、オイカワさんがわたしの部屋の鍵を開ける。

ベリーショート賞『オレンジジュース』